

受付番号

留学・研究計画書

氏名 下條 尚志	留学機関名 ホーチミン人文社会科学大学 (予定)
留学先国名 ベトナム社会主義共和国	留学期間 西暦 2009年6月～2011年5月
研究テーマ ベトナム中部高原社会の土地所有意識・制度に関する歴史的研究	
研究テーマの説明 (テーマの学術的・社会的意義についても記載してください)	
<p>本研究の目的は、植民地期以後にベトナム社会が動乱を経験するなかで、国家権力の周縁で生きる人々の土地所有意識や制度が、どのように変容していったのかという歴史的過程を、社会的・文化的側面から解明することである。従来の研究では、南北ベトナムの政治権力に挟まれ激戦地と化した中部高原は、犠牲者としての側面や反体制としての先住民運動ばかりが強調され、現在の土地問題も同様の文脈で語られてきた。しかし、本研究によって、当該地で生活を営む人々と土地との密接で日常的な関係性を明らかにすることで、政治闘争の側面からのみ論じられてきた中部高原の先住民の歴史を捉え直すことが可能になるであろう。</p> <p>植民地化以前のベトナム中部高原には、鬱蒼と広がる山林地帯に平地民が「未開」と畏怖した先住民集落が点々とあるのみだった。植民地化以後は、商品作物栽培に適した中部高原にインフラが整備されたものの、平地からの移民規制などにより外部世界と接触が少ない先住民集落が数多く残っていた。だが1954年植民地統治が終焉した後成立したサイゴン政権が、中部高原を国家領域に編入すると状況が一変する。ハノイ政権の軍や反体制ゲリラの温床となった中部高原は戦争の影が色濃くなると、戦略的に最重要地域となり急進的な民族同化政策が行われた。そのため、経済開発と軍事化が徹底され、それに伴い平地民の移民政策、焼畑の規制、戦略村の設置が実施された。これは土地を蹂躪された先住民の反発を招き、土地所有権などを求めた民族運動が起こる。これに対し60年代前半に政府は諸権利を認める懐柔政策をとる。しかし、コーヒーバブルなどにより農地を求めた平地民の移住は絶えず進み、先住者と移住者間の土地問題が増加した。この人の流れは1975年ベトナム戦争が終結し社会主義政権が成立した後も一貫して進行した。</p> <p>以上、先行研究で描かれた中部高原の歴史を踏まえ、本研究では、1954年以降に先住民のなかで土地所有権が意識され始めたことに着目する。戦争や民族運動などの政治的要因というよりは、その状況下で急速に浸透した商品経済や、外部世界との接触などの社会・文化的要因が、土地所有意識や制度にどのような影響を与えたのかを明らかにしたい。</p> <p>具体的には、人々の消費・慣習・生業などの社会・文化的要素を反映するものとして土地を扱い、それと人々の相互関係の歴史的変遷を追う。これにより、地域社会の視点から、近代的な領域観念が、先住民の土地所有意識・制度に根付いていく過程を明らかにすることができる。</p> <p>またベトナムの中部高原は、コーヒー生産量で現在世界第二位の地位を占め、コーヒーはベトナムの外貨稼ぎの重要な一端を担っている。そのため、コーヒーを中心とする商品作物生産への参入を目指して平地民の中部高原への移住が激増し、先住民が土地を奪われて結果的に暴動も起こるようになった。ベトナムのコーヒー生産地域はグローバルな世界市場に連動する場となっており、中部高原の土地所有に関する歴史的研究は、現代の我々にも直結する課題を含むと言える。</p>	

成果報告書

記入日 2012年 4月 19日

氏名 下條尚志	留学先国名 ベトナム社会主義共和国	所属機関:2009年10月～2010年9月南部持続発展院、2010年10月～2012年3月ホーチミン市人文社会科学大学
---------	----------------------	---

研究テーマ：ベトナム南部メコンデルタのクメール村における民族と国家に関する歴史研究
(申請時のテーマ：ベトナム中部高原社会の土地所有意識・制度に関する歴史的研究)

留学期間： 2009年9月～2012年3月

研究の背景

筆者はベトナムに留学する以前、同国中部高原地域の先住山地民と、近年同地域への移住が急増しているマジョリティ・キンを主とする開拓移民とのあいだで、土地所有に関していかなる問題が生じてきたのかについて調査する予定であった。しかし近年土地や宗教をめぐる山地民によるデモが時折起こるため、研究者が中部高原で調査を行うことは現政権に警戒され、難しいことが留学後にわかった。そこで地域こそ異なるが山地民と共通の問題を抱えている、主にベトナム南部メコンデルタ地方に暮らす先住のエスニック集団クメール・クロムに注目した。クメール・クロム（低地クメール）とは、メコン河上流に暮らす隣国カンボジアのマジョリティ・クメールに対し、下流域のメコンデルタに住むクメールのことを指す。かれらは山地民と同様にベトナム国家に対し帰属意識が低く、キンや華人からなる開拓移民とのあいだで長く衝突や交流を繰り返してきた歴史をもつ。さらにかれらはカンボジアのクメールと文化的同質性の高い集団であると考えられ、歴史的にカンボジア社会と深く関わってきた。

ベトナム、カンボジアが国民国家として誕生して以降、クメール・クロムを取り巻く状況は、国民国家建設を急速に進める両国の政治動向に大きく左右されてきた。国民国家成立以降におけるかれらの社会の動態を解明することで、両国間に展開された近現代史をそこに生きる人々の視点から再考できると考えた。

現在クメール・クロムはベトナムに約100万人いるといわれ、その大多数はカンボジアのクメールと同様に上座部仏教徒であり、主に農村部において寺院を中心に集落を形成している。メコンデルタはかつて東南アジア大陸部において広大な領域を支配したカンボジア・アンコール王朝の勢力下にあった。しかし、カンボジアの諸王朝が衰退する過程で19世紀に南へ版図を拡大するベトナム・グエン王朝の統治下に入った。1887年にフランスが両国を仏領インドシナとして植民地化すると、両国間には明確な行政区画線が敷かれメコンデルタはベトナム側に編入されたが、両国家間の移動は自由で、仏教などを通じた交流が盛んであった。フランスの支配が終わった1954年にベトナム、カンボジアが国民国家として成立し、両国間の行政区画線が国境線になると、メコンデルタに住むクメールの帰属問題が起こる。すなわち植民地期が終焉するまで文化的にカンボジア社会と密な交流を続けてきたクメール・クロムが、ベトナム国家の中でいかに生きていくべきかという問題が現実的に表面化したのである。

研究目的

本研究の目的は、ベトナム南部メコンデルタ地方に暮らすクメール・クロムが、国民国家ベトナム、カンボジア成立以降の激変する状況の中をいかに生き抜いてきたのか、また両国の独立前夜(1945~1954年)に生じた民族間衝突やベトナムのカンボジア侵攻など、民族問題に関わる過去の出来事にかれらはいかなる影響を受け、現在それらの出来事をどのように解釈しているのかという問題を解明することである。また時代の変遷とともに、ベトナム国家の中でのクメールの位置付けはどのように推移してきたのか、各政権はかれらをいかに統治しようとしてきたのかという問題についても明らかにする。

研究内容

2009年9月から2010年9月までホーチミン市の南部持続発展院に所属し、言語学者トー・ディン・ギア (To Dinh Nghia) 先生の下でベトナム語を学びながら、ホーチミン市の国家第2公文書館、南部持続発展院図書館、総合科学図書館において政策文書や統計、学術書などの文献資料の収集に努めた。

2010年10月からホーチミン市人文社会科学大学ベトナム語学科に所属先を変更し、人類学者ファン・ティ・イエン・トゥエット (Phan Thi Yen Tuyet) 先生の指導の下で研究を継続した。2010年12月から2012年3月までの約1年3カ月間、ソクチャン省チャウタン県T社P村に滞在し、同社の公立中学校でクメール語を学びながら、オーラル・ヒストリーを中心とするフィールドワークを行った。ソクチャン省は統計上クメール人口がベトナム国内で最大であり、その中でもチャウタン県T社はクメール人口が社全体の8割を占める地域であったことから、研究対象地域とした。

◆研究内容(1): ベトナム国内におけるクメール・クロムの位置付けの変化と国家の民族政策

ベトナム国内のクメール・クロムの位置付けが時代の変遷とともにどう変化してきたのか、また各時代の政権がクメール・クロムに対して実施した政策とその影響を考察した。特に植民地期、クメール・クロムはカンボジアと同じく世俗教育と伝統的教育を融合した寺院学校教育を享受し、カンボジアの教育・行政制度の中に組み込まれていたが、ベトナムが国民国家として成立した後、歴代の政権はかれらをいかなる存在として位置付けて統治し、かれらとカンボジアの紐帯をどう断とうとしてきたのかを考察した。

◆研究内容(2): クメール・クロムとカンボジア社会の関わり

クメール・クロムがカンボジアという国家や社会とどう関わってきたのかを分析した。両地域で国民国家が成立した後も上座部仏教の經典理解に必須なパーリ語を学びに、ベトナムからカンボジアに渡る僧侶がいたり、ラジオ、出版物を通じてカンボジアの文化や歴史観を受容するなどして、クメール・クロムの中には、カンボジアが文化の中心で、自分達はその周縁にいるという意識が形成されてきた過程を考察した。また生活の安定を求めて多数のクメール・クロムがカンボジアに移住した要因についても調査した。

◆研究内容(3): ベトナム国内の民族間関係

ベトナム、カンボジアの独立前夜(1945~1954年)、及びカンボジアのポル・ポト政権期(1975~1979)に、メコンデルタにおけるクメール・クロムの大規模な移動や、民族間の衝突が起こっていたことに特に注目し、クメール・クロムが、ベトナムのマジョリティ・キンや、19世紀頃に移住してきた華人とどのように関わってきたのか、また、他のエスニック集団との関わりの中で、自民族や他民族に関していかなる認識を形成してきたのかという点を分析した。

◆研究内容(4): 農村における土地改革と地主層の解体

歴代の諸政権によって実施された土地改革が調査村においていかなる影響を及ぼしてきたのかについて考察した。調査村ではかつて地主小作関係が顕著に存在していたが、サイゴン政権による土地の買い上げと小作農への土地分与政策、続く共産党政権では土地の強制接収と家族数に応じた土地の一律再分配が行われ、既存の地主層が解体されてきた過程を調査した。またかつて調査村で最大の農地を所有していた地主一族が、同村に存在するクメール仏教寺院に多大な寄進を行い続け、地主解体を経た現在でも寺の最大の庇護者としての地位を保ち続けている理由を分析した。

研究の成果と今後の課題

本研究は以上4項目の考察を通じ、クメール・クロムに対するベトナム国家の政策やカンボジアの文化的政治的影響、またかれらがベトナムの他集団やカンボジア社会との関わりの中で構築してきた重層的な社会関係と、クメール・クロムの村における土地所有の変遷を解明して、単一の国家に収斂されない、東南アジア大陸部に生きる人々の多様な歴史を考察した。

これまでベトナム、カンボジア双方を扱った歴史研究は、戦争や共産主義を直接的に扱った国際関係史についてのものがほとんどで、その狭間で微妙な立場に立たされていたごく普通の生活を営む人々の歴史を中心に据えるという視点は欠落してきた。本研究では、研究内容(1)~(4)の問題を解明することで、両国における激動の近現代史を、農村社会に生きる人々の視点で地域横断的に描き出し、ベトナム、カンボジアにおける民族と国家に関する既存の研究を、ローカルな社会の観点から問い直す。

留学の感想

普通の人々が普段何気なく語る過去の話や、人々と共に暮らす中でこまめに収集し、それを歴史として読み解いていく。私は農村においてフィールドワークを始める前、そのような漠然としたイメージで、オーラル・ヒストリーという研究方法を理解していた。しかし、村で出会った人々は、私が当初考えていたほどに日常的に過去を語ることはなく、また戦争など過去のセンシティブな話は、調査者である私に対して最初なかなか口を開かなかった。加えて聞き取り調査を開始した当初は、調査村の人名や地名などの概要もわかっていなかったため、インフォーマントが語る過去も表面的にしか理解していなかったと思う。

当初はそのようなおぼつかない状態であったが、誰かに聞いた内容を他の人にも聞いてみたり、一度話しをしたことがある人に同じ内容を何度も聞き直したりしているうちに、少しずつ調査村の人々が経験してきた過去が具体的な輪郭をもって、私自身の体験のように思い描くことができるようになっていた。

調査期間が後半にさしかかったある時、私が調査で村の中を歩き回っている時によく話し相手になってくれた近所に住む50代後半ぐらいの夫婦の奥さんが病気で亡くなった。彼女が高血圧に悩まされ、入院を繰り返していたことは知っていたが、まさか数日前まで話していた人が突然亡くなるとは思っていなかった。彼女の葬式には、その時期、他の行事や冠婚葬祭が重なったことで行けなかったが、後日直接家を訪れ、彼女の夫に香典を渡しに行った。彼はやはり深く悲しみに暮れている様子で、彼女が長く病気に苦しんでいたことや彼女との思い出を静かにゆっくりと語り始めた。そのうちに、彼らが結婚した直後に経験した「解放」(現共産党政権によって南北ベトナムが統一された1975年)後からドイモイ政策開始(市場経済が導入された1986年頃)までの急進的社會主義時代における彼ら夫婦の苦労話に話題が及んだ。

彼は急に堰を切ったように、当時、新政府によって打ち出された地主からの土地接収と土地の一律再分配、農業の集団化政策が村でどう実施され、彼らがどんな生活を送っていたのかをとうとうと、しかしなぜか楽しそうに語り始めた。かれらが経験した最も厳しい時代は、おそらく夫婦で苦労を分かち合いつつも、記憶に残る思い出の日々でもあったのだろう。

お悔やみの言葉を告げに行った場で、思いがけず話してくれたわけだが、こんな風に向こうの方から自然と過去を語ってくれるようになった。長い時間をかけて築き上げた人間関係が実を結んだ瞬間であった。長期間にわたり一村に定着し、調査を続けたことは私の糧となり、これまでほとんど明らかにされてこなかったオリジナルの歴史資料を収集することができたと確信している。

最後に、約 2 年半に及んだ長期留学の機会を与えて下さった松下幸之助記念財団の皆様にも、心から感謝を申し上げます。この留学経験を通じて、文献資料のみではなかなかみえてこない普通の人々の過去を聞き取って書きとめ、歴史として紡ぎあげていくことの意義を確信しました。留学によって得た知見を必ずや今後の研究の成果に結び付けていきたいと思っております。



〔写真 1〕 調査村で私が最もよく話した 86 歳のお爺さんと彼のひ孫。調査村におけるホームステイ先の家にて。



〔写真 2〕 見習い僧の托鉢。村の中を練り歩いて村民から施しを求める。調査村における筆者のホームステイ先の家の前にて。



〔写真 3〕 調査村における結婚式。ヌム・パイン・チョックというクメール風うどんを食べながら、日本酒の味に似たスラー・ソーという酒を回し飲みする。中央は私。